金峯山　2017.11

庄内の秋はあっという間に過ぎる。まず、鳥海山や月山の山頂が白くなり、そろそろ冬の支度か、と思って毎日を過ごしていると、ふと見上げた金峯山にも雪がついていて下はまだ秋だと思っていたのに、冬が来たなぁという気持ちになる。庄内平野の冬は、雷がゴロゴロと鳴り、重く灰色の雲が空を覆う日が多いが、まだ冬の始まりは晴れ間も見せてくれる。今日も、そんな天気だったので、鶴岡を見守ってくれている金峯山に足をのばした。

私は季節ごと、年に数回気軽に来ることのできる金峯山に来ている。標高 458m のそれほど高くない山であるが、特に季節の変わり目などは大変美しい。青龍寺からの旧参道の入り口に車を駐車し、石碑の並んだ少し広いところに登り口がある。

登山道の入り口でまず目に入るのは、「禁酒のかめ」だ。大酒呑みが治るとのいわれがあり、鎮座している。元々は商売繁盛の祈願でつくられたものらしい。それらを横目に中の宮までつづく道を歩きはじめた。

旧参道の左右には、たくさんの石碑や小滝など見どころがある。小さな沢が道のすぐわきを通っているので、耳にも楽しい。

金峯山は朝日連峰の一番端っこに位置しているともいえる。森の深さを感じる一方で、町からの距離が近いので全体の雰囲気は明るい。かつては出羽三山詣でに合わせて金峯詣でもしたと話を聞く地域内外で愛されてきたお山である。今回の森歩きは、平日の日中に実施したにもかかわらず何人もの登山者とすれ違った。

登り口から中の宮までの道は、はじめは杉林に加え、広葉樹や低木の樹木が混ざりあっている。そうしている間にふと気が付くと、大きな杉に取り囲まれている。道もさすがかつての参道、歩きにくいということもなく、一歩一歩足を運んでいればきちんと目的地に歩みを進めている実感がわく。途中には面白い形の木や、俳句などの看板もあるので、一息入れながらじっくり歩くのも金峯山らしい楽しみ方だろう。中の宮までは約 2 ㎞の参道。ゆっくり進んで 50 分くらいだろうか。最後に数段の階段を上り、山門をくぐれば大きい駐車場と中の宮、社務所が見えてくる。この日は初雪から 5 日目くらいだった。金峯神社の作業員の方たちは、忙しそうに雪囲いなどの冬支度をしていた。私はいつも、中の宮までは水筒に水を半分くらいしか入れないで、中の宮まで到着すると閼伽井（あかい）の清水で水をくむ。いつの季節に行っても十分な水量があり、勢いよく流れる水は、ここまでの疲れを忘れさせてくれる。

中の宮からは再び一時間弱の登山になる。大きな駐車場もあるので、ここから山頂を往復する人も少なくない。石段を進み、中の宮にて、今回の山歩きの無事と世界平和、それ

に個人的なお願いごとをして手を合わせた。

初冬に登る面白さは標高をあげていくと変わってくる風景の変化だと思う。下はまだ秋、中の宮周辺は冬支度、さらに標高をあげると冬になっていく、と言う感じ。雪の上に、紅葉したもみじが落葉して色鮮やかに映える。この景色は、秋と冬が同居しているところでないとみることができない。登っていくと、ブナが多くなってくる。ブナは、たくさんの葉をつけ、秋に落葉しフカフカのスポンジ状の土になることから、緑のダムともいわれ、水を保持する力が大きい。金峯山周辺の農業地帯は米やだだちゃ豆などが有名で、金峯山からの豊かな水が土地を潤している。

中腹までに、いくつかの立派な切通しを抜けていく。金峯山は、かつてはたいへん盛んな修験の山の一つで、周辺には多くの拝所や修行場跡が残っている。金峯修験の面白いと思うところは、生活圏内に修行の範囲があるところで、暮らしの身近に祈りがあったことが想像できる。そんな風に、かつて修験者たちも暮らしの祈りを携えてここを駆けたのか、などと考えつつ進んでいくと「八景台」に出る。

今回は一人での山歩きであったが、目の前に広がったその風景に「おおお！これだよ、この景色！」と声をあげてしまった。鶴岡市外全体が見渡せ、北に鳥海山、東に日本海が見え、飛島も浮かんでいる。ここに来る前に、知人に金峯山に行く話をしたら、「昔は金峯山から見下ろした街の景色が鶴の形をしているから、鶴岡という名前になったんだ。」と言っていた。酒田の城を亀ヶ崎城とよぶようになり、これに対応し鶴ヶ岡城と呼ぶようになったなどの説もあり、なにが本当かどうかは定かではない。現在は鶴岡と名付けられた当時よりも街も大きくなり、鶴の形には見えなかったが、街道が十文字に交差して建物が立ち並ぶ様子は鶴にも見えたかもしれない。

良い眺めのところで一息つき、行程を進めると山の様子も少し変わったことに気付く。岩がゴロゴロとしており、大股で息を切らしながら足をのばしてのぼっていく。頂上付近はもう雪の世界だ。御本殿のすぐ手前に、分岐があり、展望台に行くことができる。15 ㎝くらいは雪が積もっていた。展望台では、八景台よりもさらに広範囲に景色が広がり、ベンチが用意されている。ゆっくりと、海、山、川、田畑、そして人々の営みがギュッと詰まった庄内平野の豊かさを静かにかみしめる。

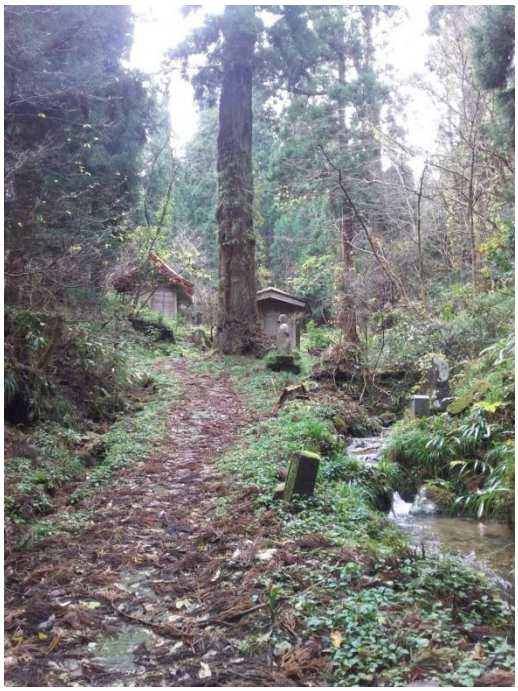
古くから修験道場として栄え、金峯山、虚空蔵山、熊野長峰の 3 山で熊野三所権現と呼ばれ、さらに母狩山から摩耶山への山域を逆峯修験の場となっていたそうだ。かつては庄内藩の祈願所とされ、今でも多くの人が訪れる。

御本殿は 2001 年に国指定重要文化財に指定され、桃山時代（1608 年・慶長 13 年）に建立、近世初期の建築として意匠的に価値が高く、東北地方における数少ない修験道の遺構として重要なものである。

御本殿を後にして、母狩山方面への登山道を少し進むと分岐が現れる。そこから、アップダウンなしのくだり道を藤沢までおりていく。途中に岩場を鎖を使っておりるなどの修験道を想像させてくれるようなところもあり、楽しめる道だ。はじめはブナ林が拡がり、徐々にスギの林の中に、時々広葉樹が混ざりながらの道で、やはりこちらも沢の音を聞きながら気持ちいい時間だ。季節によっては、登山道沿いの山野草も楽しむことができる。途中、林道を横切って下る道があるが、看板がわかりにくいので注意が必要だ。約 50 分ほどで藤沢登山口の鳥居へ到着する。沢の水で顔を洗い、バス停までもう一息、林道を歩いていく。

道のわきには竹林がある。このあたりの湯田川地区は孟宗筍の産地として有名で、5 月の上旬ころには県内各地から孟宗料理を味わうために多くの人がやってくる。しばらく歩くと藤沢の集落に入った。水路沿いに農家の作りの家が立ち並ぶ。「藤沢」の地名は、元は「梅ヶ沢」と言ったそうだが、神奈川県藤沢の時宋総本山から説法に来ていた遊行上人がこの

地で亡くなり、住民は上人が寂しい思いをしないようにと、「藤沢」へ地名を変えたという。また、作家藤沢周平のペンネームの由来にもなった地域で、藤沢周平氏が早くに亡くした妻のふるさとがこの地であったことから、つけたのだそうだ。



集落を抜けて田んぼの道を進むと、湯田川温泉街に出る。2 つの共同浴場があり、商店で入浴料を支払い、鍵を持った店員さんから扉を開けてもらって入浴する。ここは湯船と数個の蛇口があるのみで、石鹸など何もないから持参する必要がある。県内でも屈指の湯量で源泉かけ流し、湯温もやさしく、毎日来ているであろう地域の方たちとの会話も耳に楽しい、登山での汗を流すには極上のお風呂である。温泉から上がり表のベンチで休んでいると、近所の方から話しかけられることもしばしばだ。そんな風に、外から来た人に気軽に声をかけられるのは、昔から修験の人たちや旅人を受け入れる風土があったからなのかなと、金峯山の風景を思い出す。そうしている間にバスの時間になり、バスに揺られ鶴岡市内へと向かった。

(写真・文　稲田瑛乃)